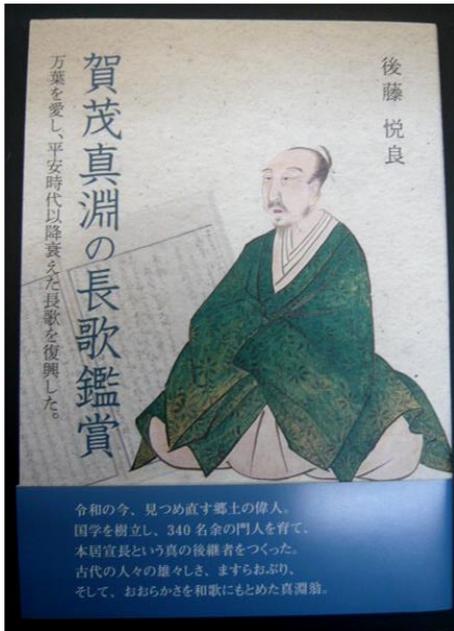


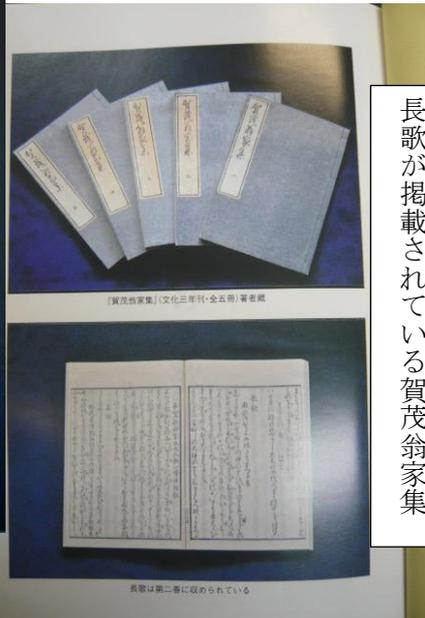
発刊 「賀茂真淵の長歌鑑賞」 後藤悦良著

賀茂真淵翁没後250年の年にあたり、当賀茂真淵記念館で長年講座講師を務める浜松市史蹟調査顕彰会専門委員後藤悦良先生が、執筆しました。万葉を愛し、平安時代以降衰えた長歌を復興した賀茂真淵。その真淵の歌文集『賀茂翁家集』に収められた全24首の長歌を取り上げ、口語訳だけでなく語釈、そして著者独自の視点から鑑賞文を加え、丁寧に解説した一冊です。真淵の和歌を理解する上で貴重な1冊といえます。

B5版79ページの仕様で、1冊550円です。記念館の他、谷島屋書店連尺店、谷島屋メイワン店にも置いてあります。



上：表紙 右：口絵



長歌が掲載されている賀茂翁家集

主な内容
 ○賀茂翁家集について
 ○掲載されている全二十四首の鑑賞
 口語訳・語釈・鑑賞 ※主な長歌
 ・殿の御賀に御杖たてまつる歌良し
 ・よし野山の花を見てよめる
 ・夏日東海道中望富士山作歌一首并短歌
 ・岡部の家にてよめる 宝暦十三年の六月也
 ・倭文字をかなしめる歌
 ・うま酒の歌

賀茂真淵記念館で販売 550円

※代金振り込みによる郵送も可能です。

【本文の内容構成】

詞書は、「夏日、東海道の旅に、富士山を望みて作る歌一首ならびに短歌」
 実際に東海道を旅した時の歌であることがわかる。ただし、真淵は幾度か
 が、いつの旅であるかはわからない。歌われている内容から、この旅は西

【鑑賞】
 最後に著者の鑑賞文を掲載

【語釈】
 磯間 磯のあたり。磯のほとり。
 (十四・三三六二)に「相模峯の小峯見そくし...」
 山にかけての山々を指しているようである。詞書に書
 が実際の街道から実際に眺められたとは考えられな
 るというよりも、富士の雄大さを強調するために観念的に歌われている
 〓 幾重にも重なった山々。 天の原なる 〓 天にそびえている様子。 構
 りゆけど 〓 「神」は雷、 照日のそらに 〓 太陽の輝いている空。 とこ
 一つの夏の意味だが、ここでは夏の真つ盛りのことと思われる。

【口語訳】
 夏の日、東海道の旅において富士
 磯のあたりから背後に見える磯
 前方をふり仰いで見ると、相模の磯
 士ふもとに湧き出て、風の止み
 い、相模の山々には雨が降り、時の
 姿を現して、曇るともなく夏の真つ盛りに雪が降り

反歌
 駿河にある富士の高嶺は、雷の音が鳴り響いているその
 富士山の麓に湧き、そこを離れて行く雲は、今足柄山の嶺にさしかかっ

口語訳文
 この反歌は唱歌「富士山：
 あたまを雲の上に出し...」
 の元になった歌と言われている。

【口語訳】
 夏の日、東海道の旅において富士
 磯のあたりから背後に見える磯
 前方をふり仰いで見ると、相模の磯
 士ふもとに湧き出て、風の止み
 い、相模の山々には雨が降り、時の
 姿を現して、曇るともなく夏の真つ盛りに雪が降り

反歌
 駿河にある富士の高嶺は、雷の音が鳴り響いているその
 富士山の麓に湧き、そこを離れて行く雲は、今足柄山の嶺にさしかかっ

【口語訳】
 夏の日、東海道の旅において富士
 磯のあたりから背後に見える磯
 前方をふり仰いで見ると、相模の磯
 士ふもとに湧き出て、風の止み
 い、相模の山々には雨が降り、時の
 姿を現して、曇るともなく夏の真つ盛りに雪が降り

長歌本文
 夏日東海道中望富士山作歌并反歌（夏の浜松から江戸への旅
 で、駿河の海の向こうにそびえる富士山を見て詠んだ長歌および反歌）